

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 16 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520015

研究課題名（和文） 老後生活のQOLと「場」に関する日中比較研究

研究課題名（英文） A Japanese-Chinese Comparative Study on the Correlation between “Ba” and QOL of the Elderly

研究代表者

松井 富美男（Fumio MATSUI）

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：60209484

研究成果の概要（和文）：

老いの「場」の概念及びその形成条件を解明し、高齢者の自殺防止の一助となる「場」のモデルを提示した。また一般的なQOLと異なり、老いのQOLが主観的で「生きがい」と親和性を持つことを明らかにした。さらに中国の家庭介護の実態調査をして、独居老人が自分の生活スタイルを変えようとならない理由に「場」の喪失への不安があること、また老いの「場」が高齢者に「生きがい」を与えることで老いのQOLが向上することを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

First, we explained the concept and conditions of “Ba”, where old people gather, and exhibited a model to prevent old people from suicide. Secondly, we explained that QOL of the elderly is subjective and similar with “worth living”, in contrast with general QOL. Thirdly, from the investigation into home care in China explained we the following: it is because of anxiety about a loss of “Ba” that an elderly person who lives alone is reluctant to change his own life, and then “Ba” gives old people feelings “worth living”, which leads to the improvement of QOL of the elderly.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：比較哲学、老い、QOL、場

1. 研究開始当初の背景

2009年10月時点で日本は出生率が1.37人、高齢化率が22.7%となって少子高齢化が一段と進み、本格的な超高齢社会に入った。また後期高齢者も11%と多く、10人に1人が75歳以上のお年寄りである世界一の長寿国となった。しかしバブル崩壊以後日本

経済は低成長時代に入り、慢性的な不況、デフレ傾向にあり、超高齢社会を支える財源不足も深刻化して、年金制度や医療制度等の抜本的な改革が喫緊の課題となっている。しかし社会制度や社会の仕組みをどう変えるのかといった議論とともに重要になるのが、老いとは何か、社会やわれわれにとってどのよ

うな老い像が望ましいのか、といった議論である。この点をはっきりしないと、高齢社会対策は徒労に終わる可能性がある。それゆえ未来に向けて新たな老い像を創出する必要がある。

2. 研究の目的

これまでに色々な老い像が提出されているが、多くは医学、介護学、福祉学、社会学、経済学などの分野のものであって、そこから醸し出される老い像は、暇人、役立たず、寝たきり、認知症のように否定的なものが中心であった。こうした老い像は、高齢者たちに老いの惨めさを突きつけ、結果的に自身の老い像から目を背けさせている。高齢者が社会の邪魔者と感じるのではなく、長生きしてよかったと感じられる社会を築くとともに、彼らの存在意義を高める積極的な老い像を創出する必要がある。そのために歴史的な老い像を調査することに加えて、老い文化の伝統をもつ中国の老い像とも比較することは有意義である。

中国の高齢者たちは色々な「場」に集って会話や遊びをして日々を過ごしている。「場」は彼らの人生に活力を与えている。「場」は劇場や球戯場のように見知らぬ人々が観賞目的で集まる、単なる空間的な場所とは異なる。この場合には人々は互いに結ばれてはおらず、単なるモノイドとしてバラバラな集合に過ぎない。つまり、「場」は建物や施設のような空間的場所とは異なり、むしろ「間柄」に近いものである。

「場」は日本にも見られる。しかし日中の「場」を比較した場合、広場や施設などのハード面では、中国よりも日本のほうがはるかに優れていても、ハード面のよさがそのまま「場」のよさになるわけではない。「場」は「生きがい」などのソフト面と密接に関連すると考えられる。そこでどのような「場」が高齢者にとって真に必要なものか、また「場」は高齢者のQOLの向上にどのような影響を与えるのか、などの問題について検討する。

3. 研究の方法

まず、老いの「場」の概念及びその形成条件を検討することで全体の見通しを付ける。そして高齢者が求める「場」のタイプを見極めるために、国内外の図書館、研究所、博物館などで関連資料を収集する。中国人高齢者の資料収集に当たっては中国人研究者の協力を得て進め、特に重要だと思われる文献については日本語訳データを作成する。

次に中国高齢者が利用する「場」の実態調査をする。対象となるのは北京市、重慶市、成都市、南京市、長沙市などの諸都市である。

各市街地の広場や公園などで過ごす老人たちを観察し写真や動画に収める。その際にプライバシーの侵害にならないように特段の配慮をする。また各地域に点在する色々な養老院や介護施設を可能な限り視察をする。また「場」の内実を知るために、①日時、②場所、③人数、④年齢層、⑤目的（遊び）、⑥満足度などの項目を中心にして、中国人高齢者から聞き取り調査を行う。その際に「遊びがボケ防止になる」と言われることに対して、彼ら自身がどう考えているかを確認する。これらの調査データを基に中国人高齢者がどのような「場」を選んで、それを享受しているのかを分析する。

日本の「場」については通時的な方法を採用する。日本の高齢者が余暇をどのように過ごしているのかを調査する。高齢者は都会では年金生活者であるのに対して、農村では農業などの自営業に従事者として働き続ける。これにより「場」の形成の仕方も異なってくると考えられる。カルチャーセンターや村祭りも「場」の一種であるが、これらが老後生活にどのような影響を与えているのかを調査する。調査に当たっては聞き取り調査の他にインターネットなどの情報も活用する。その際に「場」に無関係に成り立つ「生きがい」も存在する可能性がある。この点に含めて中国と日本を比較する。また近年、日本の高齢者の自殺率が高いことを踏まえ、自殺防止の一助となる老いの「場」のモデルを提示する。

次に、高齢者にとってよい生活とは何かを検討するためにQOL概念を調査する。老いのQOLは大きくは病人や要介護人を対象にしたものと健常人を対象にしたものに分かれるが、本研究は後者を中心にする。後者は「生きがい」と親和的であるけれども同一ではない。神谷美恵子はこの語をハンセン病患者との交流から思いついたとされるが、そのことを踏まえたうえで、まず一般的なQOLの定義とその基準について検討し、次に一般的QOLと老いのQOLの異同を究明する。また中国人高齢者のQOLについても調査をする。調査に当たっては「空き巣老人」を抱える家族から話を聞くなどの方法をとる。

4. 研究成果

①「場」の概念と形成条件の解明

「場」は「場所」よりも広義な概念である。例えば家屋、建物、道路、公園などの場所は、そこに人間がいようとしまいと関係なく一定の物理的空間を表すのに対して、「場」はこのような物理的空間とともに人間存在をその契機として含む。「場」は人と人との繋がりを可能にする場所でもある。「場」と近似的な概念は「トポス」(topos)である。「トポス」は「ある事物を包み囲んでいるものの、

その事物に直接する（最も内側の）動かされえない境界面」として定義される。すなわち、「場」には事物を「包み囲む」という意味がある。また「場」は「だれも見聞きできる接近可能な領域で、しかも有機的生命一般を育む地球や自然とは異なり、人工物を介して人々を結びつけたり分離したりする世界」を意味する。高齢者のための「場」は公共的であると同時に私的である。この二重性が重要である。人々は外側の「包むもの」だけではなく、その内側にある「何か」を求めて集まる。その「場」を形成するのは人間存在、すなわち人と人とを繋ぐ「なかま」である。高齢者にとって仕事の代わりになるのは趣味や遊びである。遊びの本質は、自発的（自由な）行為や活動、自己目的性（非生産性）、空間的制約（被隔離性）、歓び、非日常性などである。以上のことから、高齢者の「場」は、包み囲む空間、私的領域の公的領域への介入、「なかま」としての人の集合、あいだ、自由、目的、歓び、日常性などの諸要素を含むことが分かる。

② 老いの「場」のモデル提示

日本では他の年齢層に比べて65歳以上の高齢者の自殺率は著しく高い。高齢者は特に年齢的な「危機」を持つわけではない。それゆえ中年男性とは異なる高齢者のための自殺対策が必要である。高齢者の自殺原因の中心は、健康問題であるが、それに経済問題、生活問題、家庭問題などが複雑に絡む。また「老化」と「鬱」は密接に関連する。「鬱」は自殺の直接原因であるのに対して、「老化」は自殺の間接原因である。そこで「鬱」を解消する方法が大切になる。高齢者が鬱傾向を持つのは当たり前で、そのこと自体はさほど問題ではない。それよりも彼らが自身の不安や悩みを口外せずに心の奥に溜めておき、ストレスとなるのが問題である。これを解消するには高齢者が気軽に語り合える「場」が必要である。ただし、日常性から逸脱した「場」は望ましいものではない。高齢者がだれからも干渉されずに自由に語り合える「場」、日頃の警戒感や緊張感から解放されておりそのまま自分を曝け出すことができる「場」が重要である。そのモデルが江戸時代の銭湯文化に見いだせることを指摘した。

③ 老いの QOL の解明

QOL に関する主張や言明は、「評価的」であるか、「道徳的に規範的」であるか、のいずれかである。前者は「性質」にかかわり、後者は「規範」にかかわる。QOL と SOL はしばしば対峙されるが、前者は相対的な生命観によって、後者は絶対的な生命観によって支えられる。QOL を高めるとか QOL を維持するとかいった場合には「人格的生命」が問題にな

る。QOL は「よく生きる」というソクラテスの命題によって象徴される。一般の意識調査では主観的な観点は無視されがちである。しかし安楽死や尊厳死では主観的な QOL が重要である。QOL の中身はプライドや尊厳である。WHO によれば、QOL は「個人が生活する文化や価値観の中で、目標や期待、基準や関心にかかわる自分自身の人生の状況についての認識」として定義される。この定義は、生命倫理学だけでなく、医学、心理学、老年学、リハビリテーション、社会政策などの分野でも、ごく標準的なものとして受け止められている。WHO は QOL の評価指標の作成に当たって、各国の病人、健常者、医療専門家たちの意見を基にしたので、この指標は病人、障害者、老人、健常者など、いろいろなタイプの人間や集団に応用可能である。QOL は生命倫理、医学、政治や法、介護などの領域で使用される場合には「中止」や「打ち切り」を正当化するための基準、すなわち一種の「線引き概念」である。それゆえ QOL は「尊厳」と逆方向にあるといえる。「生きがい」は、人生のうちに積極的価値や精神的充実感を見いだそうとする意識をいう。積極的価値を志向する点では「生きがい」と QOL は似ているが、前者では「自己」の視点が問題となるのに対して後者では「他者」の視点が問題となる。「生きがい」は Life の謳歌や充実を目指すのに対して、QOL は Life の限界を意識させて諦観を呼び起こす。その意味で両者は別方向のベクトルを持つ。

老いの QOL は一般的な QOL 概念から区別される。老いの積極的価値を見出すためには、「生きがい」なども取り込んだ評価指標が必要である。それは高齢者の幸福観と深くかかわる。健康は老いの QOL にとって最も本質的な要素である。「場」が老いの QOL に影響を与えるためには、「場」は QOL から独立していなければならない。「場」は QOL によって規定されるのではなく、反対に QOL を規定する。すなわち、「場」が高齢者に「生きがい」を与えていると思われる。

なお、老いの QOL に関するこの知見は、西南大学（中国重慶市）で開催された国際シンポジウム（「老いと生命倫理」）でも披露した。そこでの共同討議を通じて、中国の老い文化も主観的な QOL を重視していることが明らかになった。

④ 中国の「空巢老人」の実態調査と分析

「空き巣老人」とは、「子女が家から離れた後の中老年の夫婦」をいう。すなわち、成人して仕事、勉強、結婚等の理由で家を出ていった子どもの親のことである。「空き巣老人」はさびしがりで、不眠、自律神経異常、高血圧、冠状動脈心臓病、消化性潰瘍などの病気になるやすく、また他人の妨げとなるため

に、心身の介護が必要である」と言われる。「空き巣老人」は中国では大きな社会問題となっている。中国では老人ホームに親を入居させることを「不孝」とみる傾向がある。また老人ホームへの入居は子どもに捨てられた証だと考える親もいる。そうした考え方は都市よりも農村でいっそう根強い。多くの中国老人は、晩年を子どもや孫と一緒に過ごし、家族に見守られて死ぬことを幸せだと思っている。それゆえ中国では自宅介護が中心にならざるをえない。しかし「空き巣老人」の受け皿が社会的に用意されていない。この問題は、4-2-1世代になると一段と深刻化する。そのことを「輪流」の事例を通じて検証した。中国政府は人口抑制政策の犠牲になった一人っ子世代のためにも、「孝」の復権を唱えるだけでなく、社会的な受け皿作りを急ピッチで進めるべきである。それが中国政府の喫緊の課題である。事例の「輪流」は自宅介護の在り方を考える上でも参考になる。介護を挟んで、見る側にも看られる側にも独自の実存的時間が流れている。中国の自宅介護の調査をしてみても、社会施設や専用のスタッフが介護の基本ではないことを知った。「場」のない介護は早晩崩壊する。中国人高齢者にとって「自宅」や「家庭」は彼らの生活史が満載された究極の「場」である。また「空き巣老人」の家族にとっての「場」がコミュニティにあり、それがどのような意味を持っているのかを突き止め、中国政府が進める家庭介護の実態とその問題点を浮き彫りにした。

以上のことから、「独居老人」が自分の生活スタイルを変えようとする理由の一つに「場」の喪失への不安があること、「場」が主観的なQOLと密接に関係すること、QOLが「場」を規定するのではなく「場」がQOLを規定すること、そして老いの「場」が高齢者に「生きがい」を与え、そのことが結果的に老いのQOLの向上に繋がることなどが明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- (1) 松井富美男、中国における「空き巣老人」という社会現象をめぐって—老いに関する日中比較研究—、HABITUS、16巻、査読有、2012、pp. 27-42。
- (2) 松井富美男、QOL 概念の再検討—生命倫理及び老い研究のキーワード—、「総合人間学」実施報告書、巻なし、査読無、2011、pp. 54-64。
- (3) 松井富美男、老いの「場」の研究—自殺

防止のための「場」を求めて—、広島大学大学院文学研究科論集、第70巻、査読無、2010、pp. 1-17。

- (4) 松井富美男、老いの「場」に関する基礎的研究、広島大学大学院文学研究科論集、第69巻、査読無、2010、pp. 1-19。

[学会発表] (計2件)

- (1) 松井富美男、老いと生命倫理、現代倫理学国際検討会—現代倫理学に関する国際シンポジウム— (招待講演)、2011. 9. 14、西南大学 (中国重慶市)
- (2) 松井富美男、日本生命倫理の過去・現在・未来、招待講演、2009. 9. 24、長江師範学院 (中国重慶市)

[その他]

ホームページ等

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/fmatsui/index.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松井 富美男 (Fumio MATSUI)
研究者番号：60209484

(2) 研究分担者

該当者なし

(3) 連携研究者

該当者なし

(4) 研究協力者

- ・王 官成 (Guancheng WANG)
中国・重慶工業職業技術学院・教授
- ・王 艷玲 (Yanling WANG)
中国・長江師範学院・副教授
- ・呉 献萍 (Xianping WU)
中国・中南林業科技大学・副教授